
Die nacht

その夜

Story by Makoto Nekoya

(一) その夜

帝国暦四八六年四月。帝国軍少将オスカー・フォン・ロイエ
ンタールは、密かに帝都宇宙港へ降り立った。
テンベルホーフ

連絡通路を通り、送迎ゲートに入ったロイエンタールの横顔を、青白い稲光が照らし出した。帝都は、時ならぬ激しい雷雨の中に降り込められていた。

「嵐が——」

それが不吉のもののように思われ、そう思った自分にロイエンタールは大きく唇を歪めた。たかが天候に先行きの吉凶を占おうとしてしまった自分が、ひどく愚かな存在に思えたからだ。彼の母も、遺伝学や数学的確率よりも、神々の呪いと占星術にのみ信を置くような女性だった。

ただ実力のみをもって我が道を来た自分ではないか。今更、ありもしない予兆などに心を煩わせるべきものではあるまい。よしんば、すべての兆しが凶報を示すものであったとしても、ただ自らの力によってのみ行く手の障害をかみ砕いていくべきではないか。

「さあて——どうすべきかな」

呟いたのは、これから採るべき行動の是非を問うためではなく、そのための手段の選択についてだった。自分たち……つまりは彼ロイエンタールと、親友であるウォルフガング・ミッ

ターマイヤーの運命をあの若者に委ねる。この点の決意は何も揺るがない。いまさら迷ったところで、ミッターマイヤーを獄中から救い出すべきはないのだから。

「これはやはりアポを取るべきかな……それとも、早朝を狙って朝駆け、さもなくば、このまま夜討ちという手もある。善は急げと言うが——」

この天気だ……ロイエンタールはひっきりなしに閃いては、すでに夜の闇と、さなきだに厚い雷雲に覆われた帝都の空を見上げた。吹き付ける豪雨が、送迎ゲートの厚い防弾ガラスを滝のように流れ下り、わずか数十メートル前のシャトルの輪郭すら、曖昧に歪ませている。

この天候さえなければ、ロイエンタールは最後の選択肢を採るのを躊躇^{ためら}わなかったはずだった。一分遅れば、それだけミッターマイヤーの生命が危殆^{きだい}にさらされる確率が増えていく。行動は早ければ早いに越したことはない。

だが、そのロイエンタールですら、やや二の足を踏みたくなるほどの、それは悪天候だった。具体的な行動を決める前にほんの僅かの時を起さくなって、ラウンジに足に向けたのもまさにそのせいだった。

「コーヒーをくれ。銘柄は何でも良い。ブラックで頼む」

「私にも一杯おごってくれないかしら、提督」

不意に横合いから声をかけられたが、ロイエンタールは目もくれなかった。

「女なら間に合っている。それに今夜は先約がある。つきあう時間はない——うわっ！」

冷然とした言葉に、帰ってきたのはコップ一杯の冷水だった。

「何をする!？」

「レイディに無礼な口を利いたお仕置きよ」

「な——」

啞然として、ロイエンタールは声の主を見つめた。

昔は金髪だったのだらう。すでに透き通るような白髪に変わった頭髪を、きつちりと高く結い上げたその女性には、どんなに若く見積もってもロイエンタールの祖母の年齢に見えた。服装は地味だが、うんと念入りに仕立て上げられた極く高価なものであることを見誤るロイエンタールではない。そして、その服のあちらこちらに雨をかぶってしまったらしい跡が大きく染みを広げているのにも。

「……し、失礼した、フラウ。てっきり……」

「テンペルホーフのこのラウンジまで入り込んでくる娼婦はいないわよ。認識不足ね。酷い雨で冷えてしまったわ。哀れな老女に熱いコーヒーを奢るのも、栄えある帝国軍人としてのたしなみではないの?」

「フラウにコーヒーを。うんと熱い、濃いのをな……フラウ、ミルクは?」

「ミルクをお願いね——ありがとう」

最後の一言はウェイターに向けたものだった。早速にミルク